
多重人格者と不良組

もこりん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

多重人格者と不良組

【Nコード】

N3069Z

【作者名】

もこりん

【あらすじ】

海星高校、三年一組を新しく担当することになったのは新米教師、風間美花先生！

元気いっぱい教室に入った美花に対する生徒たちの言葉は「先生が、俺等の担任なわけ？ なんか頼りないな。」という罵声の一言。

そう！ここはこの学校一番の不良クラス。

そんなクラスで最初に暴れたしたのは、なんと教師風間美花！！

性格に言えば美花のうちに眠る多重人格のうちの一人、勇花だった。

多重人格の先生とどうしようもない不良生徒の凸凹な学校生活が始まった！

疑いを晴らしたり、転校生が来たり、謎の青年が来たり、変な組織に遭遇したり？！

(前書き)

この作品の中に、二重人格等を科学的に作りだすという設定がございます。

もし、さまざまな理由でこの設定に不満を持つ方は観覧をお控えください。

今日この県立海星高校^{かいせい}に転任してくる教師がいた。その教師は校長の前に立ち恐る恐るドアをノックした。

「入りました」

「し、失礼します」

校長に言われるまま彼女は部屋に入った。

「は、初めまして。風間美花^{かざまみか}と言います」

どこか物静かなイメージを漂わせる彼女は校長の東山《とうやま》に深々と一礼した。

「君には三年一組を受け持ってもらおう」

東山はそれだけ告げると美花に教室に向かうよう告げた。

美花が受け持つ一組ではさっそく美花の噂が流れていた。

「おいっ。このクラスの新しい担任ってどんな奴かなー？」

「噂じゃ、女だってさ」

「マジかよ？」

「ねえ、その先生の噂^{はぜゆうこ}なんだけど」

一組の生徒である羽瀬優子^{はせゆうこ}が話出すと、他の生徒達が話に食いついてきたので優子はさらに話した。

「その先生、なんでも前の学校で暴力事件起こしてその学校くびになつたらしいよ」

「暴力事件ってどんな？」

「生徒一人半殺しにしたんだって」

「えー、うそー？」

クラスは一時騒然としたがこのクラスのリーダーである園宮聖也《そのみやせいや》が切り出した。

「つま、どんな奴でも俺等に教師はいらねえんだ。そいつも潰してやる」

話で盛り上がっている最中、クラスのドアを開けて美花が入ってきた。みんなが席に着く中で聖也が「作戦開始」と合図を出すと他の生徒は「了解」と頷いた。

「は、初めまして」

噂とは違う外見に戸惑う生徒達だが、美花が自己紹介を終えると同時に聖也が話した。

「先生が、俺等の担任なわけ？なんか頼りないな」

いきなりの聖也の一言に同様する美花だったが、とりあえず聖也に言葉を返した。

「えーっと、聖也君だね。私、先生としてそんなに頼りないかな？」

「先生？あんたみたいなダメ人間なんて先生って呼べないでしょ？！噂じゃ暴力事件起こしたらしいし」

「そ、それは、事情があって」

「子供を半殺しにする事が許される事情って何だよ？」

「また、今度もやるんじゃないの？」

「やだ」

「先生なんだから、わきまえなよ」

生徒達の毒舌な言葉を聞いているうちに美花は何も言わなくなつたが、それまでの美花とは違う違和感を聖也達は覚えた。そして美花が口を開いた。

「う、うるさい・・・」

「はっ？今何か言った？」

「聞こえなかった？うるさいって言ったんだよー！」

その瞬間美花は教卓を蹴り、暴れだした。

「てめーら、黙ってきいてりゃ人を見下しやがってよー」

「教師がそんな言葉使っているのかよ？」

今田拓哉が挑発すると美花は拓哉を押し倒し拓哉に言った。

「教師だ？それは、美花の方だろうが！」

「何言ってるんだよ。お前、風間美花だろ？」

「違う！あたしは勇花^{ゆうか}。美花なんかじゃねーよ」

「た、助けてくれー」

勇花の拳が拓哉に降りかかろうとした時だった。

「はっ！・・・」

「な、何だ？」

勇花は振り上げた拳をおろし、拓哉に向かって謝罪を始めた。

「た、拓哉君！ご、ごめんね」

「な、何なんだよ？お前」

「こ、これは・・・、そ、その」

美花が弁解に困っていると何人かの騒ぎを聞きつけた教師たちが一組に入ってきた。

「何事ですか！」

「俺、今殺されそうになったんだ。この担任に！」

「風間先生ホントですか？」

「あの、わ、私その・・・」

「木村先生。ここは、私に任せて授業を続けてください」

そこへ校長の東山が表れ、とりあえず事態を収拾した。

「今日の三年一組授業は、手の空いてる先生にお願いします。風間先生は、今日はもうお帰りなってください。明日の朝、また来てください」

「は、はい」

その後も、東山の適切な処置により何とか大事にはならず済んだが、美花には罪悪感がいつまでも残っていた。

その日の帰り、聖也は美花の行動に不信感を感じていた。

（今日のあいつ、何だったんだよ。わかんねーな）

「はあー」

「っん？お、お前は！」

「あっ！確か聖也君！」

そこには落ち込みながら土手に座り込んでいる美花がいた。聖也

は触れて良い内容なのか迷ったが、美花に今日の事を聞いてみることにした。

「なあ、今日のあれなんなんだよ」

「えっ？」

「お前、何で拓哉にいきなり飛びついたんだよ？」

「えっと・・・」

「あいつ勇花って言ってた。お前じゃないんだろ？」

美花は少しためらった様子だったが、しばらくした後、聖也に向き直り自分の真実を語りだした。

「じつは、私ね人格をいくつか持っているのさっきの勇花もそのうちの一人で・・・」

最初は何を言っているのか理解しがたかった聖也だがそのまま何も言わずに話を聞いていた。

「小さい頃、かなり大きな交通事故に巻き込まれちゃって、それが原因で他の人格が生まれたらしいの」

「らしいってどういうことだよ」

「私、その時のことあんまり覚えて無くて、事故の事も勇花から聞いた話なの」

「へえ・・・。じゃあ、何でそのこと拓哉に言わなかったんだよ？」

「今までこんな話信じてくれるの姉さん位だったから・・・。聖也君は信じてくれるのね？」

優しく微笑む美花の姿に照れたのか聖也はそっぽを向きながら一言、「別に」と言ったのであった。

翌日、普通通りに登校した美花は廊下で美花と同じ年の水内三恵みなうちみえ先生と出くわした。

「あっ、水内先生」

「あら、風間先生。昨日は大丈夫でしたか？途中で帰られたそうで

すけど・・・」

「はい。もうだいじょうぶです」

「そうですか」

「でも水内先生、教師ってやっぱり楽しいですよね？」

「どうしたんですか？いきなり」

「いえ、ただ生徒の良い所とか分かってくるとなかなか楽しいと思
って」

「誰か、生徒の良い所でも発見したんですか？」

「はい。園宮くんの」

「そのみやって、園宮聖也の事ですか？」

「はい。とっても、いい子ですよね？！」

水内先生の表情が重苦しい感じになり、やがて三年一組の事を話
し出した。

「風間先生、あの三年一組の生徒はとても乱暴な子達で今までの担
任の方々は全てこの学校をやめておられます。先生たちの間でも噂
が絶えなくて。先生達は、あの教室をこう読んでいます『生徒のゴ
ミ捨て場』と・・・。園宮は、そのゴミ捨て場のリーダーなんです
よ。そんな生徒に良い所なんて・・・」

「ありますよ。確かにみんな口も態度も悪いけど、でもやっぱりや
さしい所もありますよ」

「そ、そうでしょうか？」

水内先生は理解出来ないという感じだったが、それでも美花は聖
也の事を考えるととても嬉しくなった。そして、そのままクラスへ
向かったのだった。

上機嫌でクラスに向かった美花だが、クラスでは昨日の美花の行
動に対して生徒達が話していた。その中心にいたのが被害者の拓哉
だった。

拓哉は美花を見るや否や美花を罵倒し始めた。

「来たんだ、人殺し女」

「た、拓哉君・・・」

「俺の事また殺す気？」

「昨日はご、ごめんなさい」

「はあ、ごめんで済みます気？こっちは、殺されかけたってのにさ」
「・・・」

「聖也、こいつの事また前みたいに」

「いやっ。待て。もう少し後だ」

「何でだよ？」

今にも喧嘩が始まりそうな空気の中、三年三組の担任、吉田先生よしだが入ってきた。

「今田、今田拓哉！」

「何だよ？」

「職員室まで来い」

いきなり拓哉が呼ばれ、クラスは一時静まり返ったが、気になった聖也と美花は拓哉の後を追った。

「何の用だよ」

「お前この前、三年三組のやつにいちゃもんつけたらしいな」

「ああっ？何の事だよ？」

「とぼけるな！一昨日の午後七時ごろ塾帰りの生徒にいちゃもんつけただろ」

「やってねえって言ってんだろ」

吉田先生と拓哉の口論を聞き、加勢に入ろうとした聖也だったが後ろから思い切り引っ張られこけそうになった。

「やめておけ」

聖也を止めたのは勇花だった。

「何でだよ？」

「あいつをここで評判の悪いテメエが庇っても逆効果だ。それに、美花にも被害が出る。ここは無視して・・・」

「本当らしいな」

聖也の言葉が気に入らなかつたのか勇花は聖也に反論した。

「どういう事だよ」

「あんたと美花は全くの別人だ」

聖也は怖い顔をしながら勇花を見つめたまま話を続けた。

「確かに見た目や声だけじゃあんたと美花の違いなんてわからねえ。でも、その魂を見れば一目瞭然だよ。美花の場合なら俺のことは止めるかも知れない。でも自分を顧みたりする奴じゃないだろ」

「そ、それは・・・」

その時、勇花の頭に美花の声が直接響いてきた。

（勇花・・・）

「美花？」

（私なら大丈夫。代わって！）

「で、でも。テメエはいつも無茶し過ぎなんだよ。あたしが出てきて休ませねえと！」

（ありがとう。でも、ここで教師をしてるのは勇花じゃなくて私だから）

「美花・・・。あゝもうわかったよ！！」

勇花は嫌そうながらも吉田先生の方へ近づいて行った。

「すいません、吉田先生」

「な、何ですか？風間先生」

「うちの生徒が何かやったんすか？」

「この今田が、うちのクラスの生徒に喧嘩を仕掛けたんだ」

「証拠はあるんですか？」

「ああ、生徒の話では、やったそいつが名を名乗ったそうだ。顔はよく見えなかったそうだがはっきりそいつは、今田拓哉と！」

「でも、顔見てないのにそいつが名乗っただけでこいつと特定するのってきつくないですか？名前言うだけたら、その優等生にも出来ますよ」

「う、うちの生徒を疑うというのか？」

「だったら、そっちだってうちの生徒を疑ってるじゃないですか」

「こ、こいつらはしよせんゴミ箱に捨てられたくずじゃないかそれ
をうちのやつらと一緒にされたら困る」

「こっちだってうちの生徒をあんたのこのガリベンと一緒にされ
ちゃ困る」

「な、何だと？」

「まあ、っていうことでハッキリした証拠が出るまではこの話は無
しっつうことで」

勇花がそこまで言うのと、吉田先生も諦めたのか歩いて行ってしま
った

「全く、いやな奴だな」

「礼なんていわねえぞっ！」

「いらねえよ」

「拓哉大丈夫か？」

「ああ」

「良かった。あ、あの勇花。ありがとう」

「だから、礼はいいって。あたしは美花のためにやっただけなんだ
から、礼は美花にしときな」

「うん」

勇花が立ち去った後に拓哉は納得できないような顔をして聖也に
尋ねた。

「なあ、聖也何なんだよあいつは？」

「俺らの、新しい先生だよ。今までとは一味違う」

そう言い終わると二人も教室へと戻った。

その数週間後、拓哉が聖也に怖い顔で話しかけてきた。

「なあ、聖也」

「ああ？」

「いつになったらあいつを追い出すんだよ？」

「なんやかんやで、あいつが来てから1週間になるぜ」

「・・・そーだな」

「このままじゃこの三年1組はあいつに乗っ取られるぜ?!」

「うゝん」

聖也の曖昧な答えに拓哉は怒り聖也にさらに大きな声で意見したが、聖也の態度は変わらなかった。

「確かに、あの先生今までと少し違う感じがする」

話を聞いていた優子が話してきた。

「羽瀬まで・・・。変わるかよ!先公なんてどいつも一緒だろ?どいつもこいつも俺等をゴミ扱いする!あいつも今は笑ってるけどそのうちメッキがはがれるさ」

「拓哉、お前この前から変だぞ?!あいつのこと妙に突っかかってどうしたんだよ?」

「おかしくなったのはテメエだよ、聖也。まさかテメエ、あの時のこと忘れたわけじゃねえよな?」

「覚えてるよ。でも、あいつはあの時の奴とは違うぜ!」

「んじゃ、試してみるか?」

「はあ?」

「これから一か月あいつを試して、それで決める。どうだ?」

「いいぜっ!おもしれえ」

「俺が勝ったら、これからは俺が仕切る。お前が勝ったら、あいつを認めてやる。」

「・・・わかった」

二人が話し終わると同時にいつものように美花が教室に入ってきた。

「はーい、二時間目だよ」

二人は「勝負開始」とお互い頷いた。

二人が始めたのは一組恒例の先公試しと称して行われる「抜き打ちテスト」と呼ばれるもので、先生がどのぐらい生徒の言動に耐えられるかというものののだが、今まで耐え抜いたものはいなかった。

「先生って、乱暴でこのクラスさえまともに出来ないのになんでセンセーやってるの？」

いい加減、気づけば？あんたはこのクラスに必要なえってこと」

「拓哉君にとって私は必要ないかもしれないけど、私にとってはみんなが必要な。先生になった理由もしっかりあるんだよ」

「どんな理由？」

「高校生の時の先生に憧れてたの。すごく優しくしてくれた」

「テメエの教師は良くても俺らの教師は最低だった」

拓哉はそれだけ言う classroom を飛び出していった。美花はあわてて拓哉の後を追ひ、教室から出て行った。

「た、拓哉くん。待って!!」

「は、放せよ。どうせテメエもあいつと一緒になんだ!」

「私は拓哉君を他の子と一緒になんて思っていないよ」

「は？」

「私は知ってる拓哉君がただの乱暴する子じゃないことを。どうして、そんな風になってしまったか教えて？」

拓哉は下を向き長い間黙っていたが、やがて少しずつ話し話し始めた。

「五ヶ月前、一人の教師が俺らのクラスに来た。そいつ、今までの奴と違った。俺らを見捨てない奴だった。でも・・・ある日、聞いたんだ。そいつが俺らの悪口を言ってるのを・・・。それで、そのこと聞いてみたらそいつは、「あんたらを本気で面倒見るわけないでしょう」って。それで次の日からそいつは来なくなった。それで、教卓の上に紙があつてこう書かれてた『生徒のゴミ捨て場にはもう用はありません。』って」

「それって・・・」

「そいつは、俺らを捨ててゴミ捨て場つつう名前を与えだんだよ!!」

「そうだったんだ。でも拓哉君、私のことはゆっくり見極めてもら

っていいよ。乱暴もしちゃったし、それくらいかかって当然だよ。
でも、私があのかラスの担任である限りもう誰にも、「ゴミ捨て場」
なんて言わせないから」

「お、お前はなんでそこまで俺らを・・・」

「言ったでしょ？ 私にはあなたたちが必要だって。せつかく革命起
こしてもそこに座ってくれる優しい生徒がいなくちゃ張り合えない
もん」

「革命？」

「うん！名づけて「ゴミ捨て場再生革命」」

「はっ？お前バカ？俺たちはとっくの昔からそんなの望んじゃねえ。
それに今更、変われねえよ」

「変われなくなんかないよ」

「えっ？」

「変わるよ。どんな人間でもどんなに道を間違えてもまたやり直
せる。自分が強く望むなら」

「こんなダメな俺でも変われんのか？」

「もちろん！！」

「・・・」

「変わっていいこう。どんなに遠くても、憧れの自分になるために・
・」

「うん・・・」

拓哉は少し照れくさそうに微笑みながら答えたのであった。

「たいへーん！！！遅刻！遅刻！！」

美花は学校までの道のりを猛ダッシュで走っていた。その理由は
他でもなく遅刻である。

「何で先公が遅刻しかけてんだよ！」

話しかけて来たのは自転車に乗った拓哉だった。

「あつ拓哉君！・・・ってなんで自転車乗ってんの！チャリ通は禁止だよ！」

「そんなこと言ってる場合かよ？遅刻してもしらねえぞ？」

「えっ・・・あー！」

「ったく、乗れよっ」

「えっ？だ、だから」

二人が口論をしていると学校の予鈴が辺りに鳴り響いた。

「ああ、予鈴が」

「ったく！損な生き方だな」

拓哉はそういうと自転車から降り始めた。

「どうしたの？」

「テーマと一緒に行ってやる」

「でもそしたら遅刻するよ？」

「別に俺は良いよ。でも、先公が寝坊で遅刻ってヤベえんだろ？俺と、いろいろ話して遅れたって言えば・・・」

「・・・ありがとう拓哉君。でも、走ろ！」

「はあ？」

「それじゃあ、ただの言い訳になっちゃうよ！だから・・・行こっ！」

「お、おい」

美花は自転車から降りた拓哉の手を掴んで思いっきり走り出した。

「風間先生、あと三十秒で遅刻でしたよ」

「おっ！拓哉あと三十秒で遅刻だぞ」

「「間に合った！！！」」

そんな今朝から時間は過ぎ、昼休みになった時聖也が拓哉に話しかけてきた。

「拓哉」

「なんだよ」

「美花、言い先公せんこうだったろ。」

「・・・。かもな」

拓哉の考えが新たまった事に安心した聖也だったが、そこへ再び吉田先生が現れた。

「今田、いるか？」

「あぁん、なんだよ」

「お前、昨日もうちの生徒にちよっかいを出したそうだな」

「だから、やってねーって言ってんだろ？」

「嘘をつくなっ！！どうせ、うちのクラスの生徒がねたましかったんだろ？あいつらはお前らとは違って優秀だからな」

「な、なんだとっ！」

二人は今にも掴みかかりそうな勢いでにらみ合っていると美花が教室に来了。

「あれ？吉田先生。どうしたんですか？拓哉君に何か用でも？」

「か、風間先生・・・。ついに、証拠が出ましたよ。今田がうちの生徒にちよっかいを出したっていうね」

「・・・はははっ！いやだなうちの生徒がそんなことするわけないじゃないですか！」

「しょ、証拠がある。この、ネックレス。お前のだろう、今田」

「な、なんでそれをお前が持ってたんだよ！」

「うちの生徒が襲われた場所に落ちていた」

「う、嘘だ！それは、この前なくしたんだ！本当に」

「なくした？そうだろうな。お前が、うちの生徒たちにちよっかいを出した時落としてなくしたんだろ？」

「違う！俺は知らない！！本当に！」

「まあ、詳しい処分は明日の職員会議でじっくり話すだろうな。それじゃあ」

吉田先生が戻って行った後、拓哉は声を上げて美花に話した。

「やってないんだ本当に。美花！俺は知らねえっ。やってねえ。あのペンダントは本当に学校でなくして！」

「拓哉君？」

「だからっ、あいつの言ってることは嘘なんだ！」

「うん。知ってる」

「えっ・・・？」

「知ってるよ、そんなこと。別に確認しなくても。拓哉君はやってないんでしょ？」

「・・・ああ」

「うーん。となると、あの証拠をひっくりかえせる証拠が必要だね。拓哉君、あのペンダントいつなくしたの？」

「お、おととい。チェーンのとこが壊れたから外して机の中に入れて。でも、そのあとそこに入れっぱなしで、校門出るまで忘れてたんだ。気づいて取りに戻ったんだけどその時には・・・」

「机に入れてたはずのネックレスがなくなっていた？」

「うん」

「そっか。ネックレスを机に入れたのって何時ぐらい？」

「三時間目が始まって少し経ったくらいだったと思う」

「わかった。あとは任せて！必ず明日までに証拠を見つける」

「あ、ありがとう」

「いいよ、べつに。先生が生徒を助けるのは当然だもん」

「美花！」

「な、何？」

「俺も手伝う。これは俺の問題だし」

「拓哉君」

「んじゃ、俺も手伝うか」

「聖也君も？」

「拓哉が苦しんでるのほっとけねえ」

「それならあたしも！」

「初瀬さんも」

その声を筆頭にクラスから「手伝いたい」という声が果敢に上がってきた。

「みんな・・・」

「それで、俺らはどうすればいい？」

「んーっと、それじゃあ休み時間探してほしいものがあるの」

「なんだ？」

「この学校で拓哉君のネックレスと全く同じものをしてる人。誰でもいい」

「わかった」

聖也達に頼み事をした後、美花は職員室に向かっていた。

「あの、水内先生」

「なんですか、風間先生？」

「一昨日って、確か服装検査ありましたよね」

「はい。あの時は朝会がありましたからそのついでに抜き打ちでやることになって」

「その時、男子は男の先生が。女子は女の先生が担当しましたよね？」

「はい」

「その時、うちのクラスの男子を担当したのって誰だかわかりますか？」

「三年一組は・・・。確か吉田先生ですよ。あの方は厳しいですから。一、三、五組の事をお願いしました。吉田先生が没収したものの山のようにありますよ。特に一組の私物が。」

「あ、す、すみません！！」

「今度から、もっと生徒に厳しく指導してくださいよ。」

「は、はい。ありがとうございました。」

美花が没収品を見ていると職員室の扉を勢いよく開けて吉田先生が入ってきた。

「みなさん！新しい情報です。初めにうちの生徒を襲ったやつも

今田のネックレスと同じものをしていたとうちの生徒が思い出したらしくってね」

美花はますますこっちが不利になったと直感した。

「これですます厳しいですな。風間先生」

「なんと言われても、うちの生徒はやっていません」

「そうですか？」

美花が吉田先生とにらみ合っていると聖也達が職員室の扉を開けて来た。

「おい、美花」

「あっ、みんな！」

「いたぜ、俺と同じネックレス持ってたやつ二人」
「誰？」

「一人は、三組の石井。もう一人は五組の鈴木」

「でも、鈴木君ほんとに持ってたのかな？」

「なんで？」

「今、そのペンダントしてなかったから」

「そういうなら、石井も変だったじゃん」

「石井君も？」

「だって、クラスのやつが石井が同じペンダント持ってるって言ったとき、ほかの人には言わないでって言ってたし」

「あれは、吉田にバレたら嫌だからって言ってたじゃん。今日もしてなかったからきつと抜き打ちの服装検査でビビったんでしょ」

「そうなんだ」

「うん」

「わかった。ありがとう、みんな」

「俺の疑い晴れそうか？」

「うん。あとちょっとだね」

「他にやれることあるか？」

「ううん。もう大丈夫。みんな、ほんとにありがとう」

「またなんかあったら言えよ」

「うん」

美花は聖也達と別れてから自分のもう一つの人格である知花^{ちか}に話しかけた。

「あとはどうする、知花」

（・・・吉田が取り上げた私物を見に行く）

「分かった」

美花は知花の言う通り再び没収品を見に行くことにした。

「水内先生」

「なんですか？」

「あの、吉田先生が取り上げた私物を見せてもらってよろしいですか？」

「ええ。向こうに全部ありますよ」

「ありがとうございます」

美花は没収品から何かを探しているような感じだった。

「・・・あった。ペンダント」

美花が搜索を続けてる間、聖也達は教室で待機をしていた

「美花、大丈夫かな？」

「平気だよ。あいつは絶対に約束を守る」

「・・・そうだよな・・・。あつ、あのさ聖也」

「ん？」

「聞いていいか？美花の事。あいつ初めて来た時に豹変したろ？あと、前に俺を吉田から守ってくれた時もなんか雰囲気違ったし・・・。あいつってなんなんだ」

「そ、それは・・・」

「あっ！先生が豹変した理由あたしも知りたい！」

羽瀬が言うと他の生徒も口々に言いだした。

「えっ？あ、あれはその」

「聖也。教えてくれ」

「じ、実は・・・」

美花は職員室を後にしていた。再び美花が知花にどうすればいいのか聞くと知花はすぐに答えた。

（警察）

「け、警察?! ち、知花、まだ刑事事件には発展してないし」

（違う。調べたいことがある）

「調べたいこと?」

（それが分かれば何とかなる）

翌日、職員会議が行われる時間が刻々と近づいていたにもかかわらず、なぜか美花はいなかった。

「美花、今日学校休んだな」

「どーすんの? もうすぐ会議始まっちゃうじゃん!」

「も、もしかして、逃げたとか?」

「んなことない! 必ず来る!・・・美花」

「今田。職員室に來い」

「・・・」

「拓哉、大丈夫だ。必ずあいつは来る。信じろ!」

「ああ」

吉田先生に連れられて拓哉は職員室に連れて行かれたのだ。しかし、職員会議が始まって、美花は現れなかった。

「風間先生は?」

「今日は来ていません」

「当然ですよ。こいつのありもしない無実の証拠探しをして大方、こいつを見捨てたんでしょ」

「お、俺はやってねーつつつてんだろ!」

「ふん。何を今さら。お前にはもう味方はいない。校長、処分を」

「・・・では、今田君はっ」

校長が判決を下そうとした瞬間、職員室の扉が開けて美花が現れた。

「待ってください!!」

「風間先生!」

「・・・み、美花!」

「少し、私の話を聞いて頂いてもよろしいですか?」

「・・・いいでしょう」

「今さら、何を聞けというんです? こいつが犯人と言う証拠は十分そろっていますよ」

「はい。ですが、私は違う考えを持ちましたから」

「違う考え?」

「はい。結論から言わせていただくと、三組に喧嘩を吹っつけたのは拓哉君ではなく、三組の石井君ではないんですか?」

「!」

「な、何をでたらめなことを!」

「まあ、聞いてください。まず、一昨日吉田先生の生徒さんがちよつかいを出されてそこにペンダントが落ちていたらしいといっていました、そんなことはありえないんです。なぜなら拓哉君はその前の放課後からペンダントをなくしていたからです」

「そ、そんなの今田がでたらめを言っているのかもしれないだろう」
「確かに、この説明ではいつも首にかけているペンダントをなくすとは考えにくいかもしれませんが」

「そうだ! 普通いつも首にかけているものが落ちたりすれば気づくだろう!」

「・・・そう、いつも首にかけていました。一昨日の服装検査の時も」

「ふ、服装検査だと?!」

「なぜ、規律に厳しいあなたが拓哉君のネックレスを見落としたんですか!」

「!・・・そ、それは」

「なぜ、ペンダントをつけ初めたばかりの鈴木君の物は没収しておいたんですか?」

「・・・」

「あなたは守ろうとしたんですよね？石井君を」

「守る？どういうことですか？」

「石井君は三年前、暴力事件を起こしています」

「ほ、本当ですか?!」

「はい。ただし、この地域ではありません。しかし、大学進学を目指している石井君にとってはどうしても消したい過去だった。彼は元々不良だったんですね。そして、この前彼の中に眠っていた不良だったころのものが何かの理由で外へ出てしまった。再び暴力を振るってしまった彼は大学受験の事が気にかかった。そしてつい私のクラスの生徒の名前を言ってしまったのでしよう。拓哉君の名前だったのは偶然でしょう。それを相談された吉田先生は何とか拓哉君に罪をかぶせようとした。違いますか？」

「・・・」

「吉田先生？」

「あいつが元不良だったのは知っていた。しかし、あの子は努力して落ちこぼれから優秀な生徒へと変わったんだ。どうにかして夢をつないでやりたかった」

「あなたのしたことは、本当に彼の夢をつなげることができたんですか？優秀な生徒の夢のためなら他の子の今を奪っても許されるんですか？」

「こいつら生徒のゴミ捨て場の奴よりも明日を必死でつかもうとしてる奴を優先するのは当然の事でしよう!!」

「・・・ざけんな・・・」

「？」

「ふざけんな!!」

吉田先生の言葉を聞き、勇花が美花と入れ替わってきた。

「風間先生？」

「クズよりも優等生を優先させろ？もっともらしいこと並べてんじやねーよ！お前んとこのガキはクズから立ち直ってここまできたん

じゃねーのか?! クズから立ち直った奴のためにクズを捨てる。そんなことしたって、誰も幸せになんかなねーんだよ!!」

「幸せになれる! 少なくとも石井は。風間先生あなたは何もわかってない。偉い者が上に行くためには、弱いものが土台にならないければいけない時だってある! この社会がそれを証明してるじゃないですか! 上に登って行く者はどうしたって下の者を蹴落して行かねばならない。上がいるって事はそれ以上に下がいるんだ! この世界は弱肉強食の世界なんだ!」

「でも、石井が土台を踏んで上に行くのは今じゃない! そして拓哉を身代りに自分だけ助かるなんて言うのは上に行く方法じゃない! ただ嫌な事から逃げて楽しい事だけをする。嫌なことは人になすり付けて自分は一隅のチャンスの時しか動かない! そんなの汚い大人と同じだ! 石井が今しなくちゃいけないのは身代りを作って上に行くことじゃない。真実に立ち向かう事なんだよ!」

それを聞いた人達はしばらく何も言えなくなった。

職員会議の結果は、拓哉には何もなく石井は詳しい話を聞いてから停学という形になった。

「・・・おお! 拓哉、美花!」

「ただいま」

「おっす」

「どうだった?」

「真犯人が分かったから拓哉君はもう大丈夫だよ」

「よかった」

「よかったね、拓哉!」

「・・・」

「拓哉?」

「・・・美花、あのさ聞いていいかな?」

「何?」

「俺ら、聖也から聞いたんだけど・・・、お前って、多重人格なの

か？」

「えっ！」

「さっき怒ってたのもお前じゃなかったんだろ？」

「・・・聞いちゃったんだ」

「ご、ごめん、美花・・・」

「いいよ。いつか話さなきゃいけないって思ってたし・・・。私は多重人格なんだ。さっき吉田先生に怒ってたのは、私の中にいる勇花。あと拓哉くんに殴り掛かったのも。それと証拠を探してくれたのは、知花っていうもう一人の私。あともう一人いる」

「本当だったんだ」

「ごめんね、黙ってて。みんなが怖がるといけないから黙ってたんだけど・・・」

「べ、別に関係ない」

「え？」

「俺はそんなの気にしない。ただほんとに知りたかっただけだよ」
「そうだよ、美花ちゃん。あたしたちは気にしないよ。っね、みんな」

「当たり前じゃん！多重人格でも俺らの先生は美花だからな」

「うん」

「そうだよ」

生徒たちの言葉に美花は笑いながら涙を流していた。

「みんな、ありがとう！」

事件の疑いが晴れた拓哉は帰り道、聖也に心の内を伝えた。

「聖也。俺さ、勇花の説教聞いてなんかすっきりした」

「そうか」

「俺も結局真実から逃げてたんだ。あの先公に裏切られたのを嘘だって否定しかしてなかった。受け入れるのを拒絶してた」

「あのクラスの奴等は俺も入れてほとんどそうだよ。でも、みんな一人一人それをのり超えて行こうとしてる。美花のおかげで」

「俺、美花を信じてみるよ」

「俺もだ」

その頃美花は勇花と話をしていた。

「はぁ、疲れたね」

（お前も人がいいな。あとは吉田に全部任せるって。あいつまた何かするかもしれないのに・・・）

「知花が、吉田先生は生徒を守ろうとしてあんな行動に出た。生徒を守ろうとして間違いに気づいたならもう同じ事はしたいだろうって言ってた。あたしもそう思ってるから」

（・・・ほんとにお前は世話好きだな）

「勇花だって、拓哉君のために吉田先生に怒ったじゃない」

（あれはあいつの態度にイラついただけだ）

「ふん」

「風間先生」

美花の前に現れたのは停学処分になった石井だった。

「今日のご苦労様でした」

「石井君、停学になったんだって？」

「いいんですよ。僕は拓哉君に罪を着せて勉強する方が辛かったんですから。それに勉強は家でも出来ますし、諦めませんから」

「そっか、頑張ってるね！」

「・・・そうだ先生」

「な、何？」

「さっき誰かと話してましたよね？誰と話してたんですか？」

「えっ・・・。ひ、独り言だよ、独り言」

「独り言？もう一人の自分と話してたんじゃないんですか？」

「えっ？」

「違いました？」

「な、なんでそんなこと知って・・・」

「なぜって、俺も同じ境遇だからだよ」

「!・・・い、石井君？」

石井の言葉使いが急に変わり石井の存在に違和感を覚えた。しかし、美花にとってこの違和感の現れ方には覚えがあった。

「俺も多重人格だよ。人工的に作られた」

「な、何言ってるの？」

「あれ？聞いたことないんだ。今、ある人が人格の実験をしてるって」

「人格の？」

「そう。一つの人格に一体いくつ人格を混合せずに入れることができるのかっていう実験を何年も行われている。でも最大はあんただよ、風間美花」

「私は実験なんて行われていない。これは偶然事故でっ！」

「ああ、そうだったね。でも、あの人はそんなお前に興味を持つてるよ。俺は科学的に人格を作り出された化学体だけどあんたは何も手を加えないで人格が生まれた、いわば自然体。自然体は珍しいからね」

「だ、誰がそんな事」

「その人の仮名はインベンター。俺は不良の魂、石井強、主人格は学。俺らの仮名はダブル。」

「学君はそのこと・・・」

「軽くなら知ってる。でもインベンターが何者なのかまでは知らないから聞いても無駄だよ。じゃあな、四つの魂を持つ女、ベスト」

「べ、ベストって・・・」

「インベンターがつけたあんたの仮名。インベンターが勝手につけたもんだけど俺らの中じゃよく使われてる。俺はダブル。あんたはベストってな」

「・・・」

「じゃあね！先生！」

「・・・」

話を聞いた美花はしばらく信じられない様子だったが、しばらく

してから勇花に相談した。

「勇花……。さっきの話って本当かな？」

（さあな、でももしあの話が本当なら関わらないほうがいいと思う）
「そうだよね」

（インベンターはあたしらに興味があるって言ってたから、もしかしたらそのうち何か起こるかも知れないし）

「うん」

（それまではどーしようもないな）

ダブルはインベンターのもとへ戻り報告した。

「じゃあ、まだ元気だったんだね？」

「はい。でも、元気って？」

「四つの人格がいつまでもあのままだと思う？もしかしたら、拒絶反応が起こるかもしれないでしょ？だから、早めに会いたい」

「ここに呼ぶんですか？」

「とりあえず、ダブルはあの子を見張っという。そのうち彼にも向かわせる」

「彼？」

「そう、ロストを」

次の日、いつも通りに教室に入った美花だが雰囲気が違うのを聖也達は感じ取った。

「みんな席について。授業を始める」

「おっ、おはよー、美花」

「……………」

「美花？どうしたんだ？」

「……………」

「も、もしかして勇花だった？」

「・・・」

「おい、美花！」

「無駄口をたたく前に教科書を開く。ちなみに私は、美花じゃない」
「それじゃあ勇花？」

「いいえ、知花」

「知花？　そういえば、美花が前に話してたっけ」

「知花が助けてくれたんだろ？　ありがとな」

「私は少し助言をしただけ」

「な、なんか美花の人格ってどれも全く違うな」

「私語はやめる。うるさい。・・・授業やるよ」

「・・・はい」

知花は、難しい問題を一組にたくさんやらせ、授業が終わり戻って行った。

「つ、疲れた」

「あいつ、どんだけ難しい問題出してくるんだよ」

「知花ちゃんって頭いいのよ」

「かもな」

昼休みになり、美花が教室に入ってきた。

「みんな、こんにちわ」

「・・・ち、知花？」

「違うよ、私は美花」

「よかった。美花か」

「なんで一時間目、休んだんだよ！」

「ごめん、ちょっとね」

「つま、いいけど」

「え、ええっと、今さらなんだけど実は今日このクラスに転校生が来ることになって、少し遅刻しちゃったんだけどさっきついたから今から紹介するね。じゃあ入って！」

美花が言うとその子は教室に入ってきた。

「この子は寺田華純てらだかすみさん」

「・・・」

「今日からみんなのクラスメイトだから仲良くしてあげてね。華純ちゃん、みんなに何か一言ある？」

「・・・別に」

「そ、そっか」

「っていうかがっかり」

華純は美花を見ながらため息をついた。

「な、何が？」

「噂のベストが担任だっていうからすごいクラスかと思ったけど、無能軍団っぽいし」

「な、なんだその言い方！俺らはお前が思ってるほど無能じゃねーよ！」

「いきなり来てなんだよその口は！」

「マジでむかつく」

「・・・待ってみんな」

「美花？」

「華純ちゃん、今ベストって。もしかして、あなた・・・」

「気づくのは早いね。その通り、あたしもあんたと同じ。自然体の二重人格」

「やっぱり」

「な、なんだよ美花。ベストってっ！」

「みんな詳しい事はあとで話すから！華純ちゃん、来て！」

美花は華純を校舎裏へ連れ出した。

「何？あいつらに行っていないわけ？」

「人格の事は話したけど、詳しいことは何も・・・」

「ふーん。っで、あたしに話？」

「・・・華純ちゃんはあたしの呼び名を知ってたから、もしかして石井君たちの仲間？」

「石井？・・・ああ、ダブルね。残念だけど仲間じゃないの。大体の自然体はやつらとは組まない。あんたみたいにその存在を知らないやつも多い」

「で、でもなんで華純ちゃんはおたしや石井君の事を・・・」

「あたしは長いことインベンターを調べてきた。兄のために」

「お、お兄さん？」

「あたしの兄は寺田裕^{ゆう}。インベンターに作られた化学体。兄を救うためにあたしはインベンターを調べてるの」

「救うって？」

「兄はインベンターの下で働いている。だからインベンターから取り戻したいの！」

「で、でもそれでなんで私のところに？」

「情報をつかんだの。近いうちにあんたと化学体の誰かが接触するって。もし、兄貴だったら連れて帰るし、違っても何か聞き出せるかもしれないでしょ？そのためにもインベンターが興味を持つてるあんたの所にきたの」

「近いうちって、石井君とか？」

「わかんない。でも、あんたと接触するのはわかってんの。だから、あんたはいつも通りで過ぎて。それがあたしのためにもなるから。でも、何かわかったら教えてほしいの。勝手だと思うかもしれないけど」

「それは別にいいけど・・・」

「ありがとう」

「でも、勘違いするんじゃないよ」

「！」

「あたし等はお前の手下じゃねえってどこ」

「あんたらしいきなりかわんだね。えーっと、気性があらいつてことは勇花？」

「そんなことまで調べてんのかよ？」

「まあね」

「・・・てめーにもあんだろ？呼び名ってやつ。それだけでも聞かせろ！あたしはそう呼ぶから」

「・・・ギ、ギャップ」

「ギャップ？変わってんな」

「うるさいっ！と、とりあえず約束はしたからね！」

そういうと華純は戻って行ってしまった。

「あっ、戻ってきた！」

華純が教室の扉を開けて戻ってくると教室は一時慌ただしくなった。

「あれ、でも寺田だけだ」

「おいっ、美花は？」

自らの席に着いた華純に聖也が問いかけた。

「ん？そのうち来るんじゃない？」

「お前も多重人格なのか？」

「よくわかったね。意外と無能でもないかもね」

「さっき言ってたベストってなんだよ」

「・・・」

「言えよ！何か知ってたんだろ？美花、もしかしてやばいことに巻き込まれてんのか？」

「それを知ってどうするの？あんたらに何ができんの？」

「それは、何もできないかもしれないけど、でも！」

「はつきり言うけど、あんたらの存在ってベスト・・・、美花にとって重荷にしかなくてないんじゃないの？」

「な、そんなわけないだろ！美花は俺らが必要だって言ってくれたんだ！」

「それが重荷なんだって！とくに今は」

「今って、やっぱりなんかあったのか！」

「そうやって聞いてくるのも興味半分だったりするんでしょ？何にもできないくせに」

「な、何！」

「あんたら、それを聞いてどうしたいの？」

「どうしたいって」

「美花ちゃんを支えてあげたいに決まってるでしょ！」

聖也が返答に一瞬困っていると言子や他の生徒がその問いに答えた。

「そうだ。俺を美花が助けてくれたように、今度は俺が助けてやりたいんだ」

「それって、結局は自己満足でしょ？あんたらとベストの関係は知らないけど、どうせ多重人格のこともあんたらが聞き出したんでしょ？ほんとに無能だね」

「なんでだよ！」

「あんた達、あたしら多重人格者が今まで穏やかに過ごしてきたと思うの？この体をうれしがってると思う？少なくともあたしはいい事なんてなかった。あたしらにとっては、自分が多重人格だって伝えることだけでも、ものすごい覚悟がいるの。あんたらにわかる？」

華純の言葉を聞いて聖也は美花の言葉を思い出した。

“今までこんな話信じてくれるの姉さんぐらいだったから”

“みんなが怖がるといけないから黙ってたんだけど”

「もう一回そういうの考え直したほうがいいよ。あたしは帰るから」
華純はそのまま帰ってしまった。

「・・・なあ、拓哉。俺ら、重荷かな」

その答えは、拓哉や他の生徒には答えることができなかった。そんな空気を換えたのはやはり美花だった。

「ごめんね、遅くなって・・・。みんな、どうかしたの？あれ、華純ちゃんは？」

「帰った」

「帰ったの？」

（もっと聞きたいことがあったのに・・・）

「なあ、美花」

聖也はためらいながらも、美花に質問した。

「聖也君、どうしたの？」

「・・・おれら、美花にとって重荷？」

「えっ・・・」

「はつきり言ってくれ」

「全然」

「・・・本当に？」

「うん。みんなは私の大事な生徒だよ。ううん、今はそれ以上の存在だよ。みんながいるから乗り越えられたことだってたくさんあるんだから」

「じゃ、じゃあ、なんで俺らに大事なこと話さなかったんだよ」

「ご、ごめんね！気にしてた？」

「俺らには必要ないから話さなかったのか？」

「違う！みんなが大切だからこそ、巻き込みたくなかったの。話せば、みんなにも心配かけそうだったから・・・でも、それが気に障ったなら謝る」

「そういうわけじゃないけど・・・じゃあ話してくれないのか？」

「ごめんね。今回は私にもよくわからないの。中途半端に教えたらみんなにも迷惑になると思うから、もうちょっとだけ待ってくれないかな。絶対に話しはするから」

「絶対だぞ」

「うん。約束する」

美花の言葉を信じてこの後誰も何も聞かなかった。

「みんな、おはよう！」

「おっす！」

「おはよう、美花ちゃん。」

翌日、昨日の事はなかったかのようにいつも通りの学校生活が始

まろうとしていた。

「じゃあ今日も学活やってくよ。」

♪プルルルル・・・

「ちゃ、着信?!」

「ご、ごめんね美花ちゃん。電源切るの忘れてた。ちょっと待って!」

着信の主は優子だった。彼女は急いで教室から出て行った。

「こんな時間に着信?」

「たぶん羽瀬の彼氏だよ」

「か、彼氏って、優子ちゃんにいろの?!」

「なんかいろらしいよ。なんか前に羽瀬が話してた」

「彼氏って・・・まだ高校生で。私なんか小学校の頃年下の子に告白されて以来なのに・・・」

「今時、高校生で恋人なんて珍しくないよ美花」

聖也は呆れるように美花に言った。

「じ、じゃあ聖也君にも?!」

「いや、俺は・・・」

「いないの?」

「つ、作らないだけだよ!!」

「またまた」

拓也はニヤリと笑いながら聖也に言った。

「な、なんだよ拓哉!!」

「べつに。」

二人の会話を聞きながら美花は教卓に肘をおいて頬杖をついた。

「それにしても、最近の子供は行動が早いよね。好きだと思ったら止まらないっていうイメージで」

ぼんやりと後ろの壁を見ながら話す美花に聖也が言った。

「好きな奴がいても行動しない美花よりはマシだろ」

「ハハハッ」

聖也の発言に教室内で笑いが起こった。

「お、大きなお世話よ!!」

みんなが美花をからかっていると優子が戻ってきた。

「ごめんね美花ちゃん」

「羽瀬、彼氏か？」

拓也は席に着く優子に問いかけた。

「か、彼氏・・・かな」

「やっぱり」

「でも優子ちゃん。そういう大切な人はきちんと見極めないと・・・」

「見極めてるよー。圭介けいすけはいい人なんだから」

「圭介さんっていうの？歳は？」

「二十六歳」

「二十六?! 私とほとんど変わらないんだけど・・・」

「愛があれば、歳の差なんてっ」

「はあー。まあ、二人がいいならいいと思うけど」

「うんっ! ありがとう!!」

その日の放課後。美花が帰っている途中の商店街で聞き覚えのある声が響いていた。

「だからもうほっというてよ! 指図されなくても自分の事は決められる!」

「自分で決めてあんな奴を選んだの?! 全く仕方ない子ね」

「優子ちゃん？」

「あっ、美花ちゃん・・・」

「あ、あのー、こちらは？」

「ああ、あたしの親」

「おや・・・。お、お母様でしたかっ! わ、私、羽瀬優子さんの担任をしております風間と申します」

「あなたが・・・。優子の母です。じゃあ優子、お母さん行くけどよく考えなさいよ」

「・・・」

「失礼します」

「は、はい」

優子の母はそのまま仕事に向かったようだ。しかし、優子は一言も何も言わなかった。

「優子ちゃん、何があったの？」

「・・・あの人は私と圭介が付き合うのに反対なの」

「そうなんだ・・・」

「でも、あたしがいくら話したって聞く耳持たないの。あの人はいつも仕事第一で家にもまともにいないくせに」

「優子ちゃん、お父さんは？」

「ずっと昔に離婚したんだって。あたしはよく覚えてないけど・・・」

「ご、ごめんね！変なこと聞いちゃって」

「いいよ、そんなこと。・・・ねえ、美花ちゃんもやっぱり反対なの？」

「えっ・・・。うまく言えないけど、すっごく歳が離れている人と付き合うのって絶対に少なからず反対の声があがるものだと思う。

私は二人がいいならそれでいいと思うけど・・・。でも、いいとか悪いとかは第三者の人が軽率にいつちゃいけないと思うから」

「そっか・・・。これから圭介と会うから、またね」

羽瀬は少し元気がない声で言うと言って行ってしまった。

「優子ちゃん」

翌日の事だった。基本授業中は一切寝ることのない優子が授業中に爆睡していることに疑問を持った美花は授業が終わった後、優子に話しかけていた。

「・・・」

「どうしたの？」

「ん……。昨日夜更かししてたから少し眠くて……」

「夜更かし？なんかあったの？」

「ううん、別に」

「ならいいけど」

このあと、優子の様子は見るからに疲れていき、さらに無断早退や欠席が増えていった。そしてついにこの数週間、何の連絡もなしに学校を長欠した。美花は心配になり学校の帰りに羽瀬の家によってみることにした。

優子の家に行くと会社を休んでいた優子の母だけがいた。

「あの、すみません、優子さんは？」

「あの子なら、もう数週間うちに戻ってきていません」

「い、いないんですか？！警察には？」

「いえ。届けてません」

「な、何ですか？帰ってないんでしょう？」

「帰ってないというか、家出です」

「家出！」

「先生と会ったあの後私と優子は何回もぶつかりまして、自分から出ていってしまいました。数日後に『彼氏の家に泊まってる』とメールをくれました」

「心配じゃないんですか？」

「あの子は何を言っても全く聞く耳持たずです。メールをしてくれたのもそれが一度きりでこちらから連絡を取っても出てくれないので、連絡手段が……」

「あ、あのー、娘さんが学生でありながら歳の離れた方と付き合い合っているのがとても心配なのはわかりますが、少しは耳を傾けてあげてもいいんじゃないですか？きっと、優子さんなりにお母様に伝えたいことがもっとあったはずなんです」

「……あの子には、私と同じ思いをさせたくないんです」

「えっ？」

「あの子の父親と結婚したのは私が十九歳の時でした」

「十九歳で・・・」

「その結婚は決して周りから祝福されるようなものではありませんでした。それからしばらくして私たちは別れてしまいました。あの子にはそんなことになってほしくないから」

「お母様・・・。あの子は、軽はずみに人を見たりはしていません」

それを聞いた優子の母は少し意外そうな顔をした。

「あなたにづらい過去があってそれを優子さんにもしてほしくないって気持ちはよくわかります。でも、きっと優子さんはあなたが思っているほど愚かではないと思うんです」

「あなたが分かるというの。あなたが優子を見ていたのはほんの少しでしょ？」

「はい、そうです。でも、それでも優子さんの良い所も悪い所もたくさん見てきたつもりです。付き合いが長いほうがたくさん理解できると思いますが、長ければいいというものでもないはずですよ。」

たった数日でも理解しようと思えば理解できるし、良い所もたくさん見つけられるんです。優子さんの全てを見たわけではないけれど、私は彼女の事を信じたい。もう少し、優子さんと話してあげてください。そうすればあなたがどれだけ自分を心配してくれているか優子さんに伝わるはずだから！」

「・・・」

「す、すみません。かってなこと言ってしまったて！でも、お母様と優子さんに必要なのは話すことだと思います」

「でも、今さら・・・」

「始めることに、今さらなんてことないと思います。優子さんは私が必ず連れ戻します。お母様はここで待っていてください」

そう言った美花は優子の家を飛び出し、優子の携帯に電話して会う約束を取り付けたのだった。

携帯で美花から呼び出された優子は、河原の土手沿いを歩いていた。

「美花ちゃん……。こんなところに呼んでなんだろう。無断長欠の事かな……」

「ゆうこー!」

「美花ちゃん!」

優子の前に幼い感じを漂わせる美花が現れた。

「久しぶりだね!あと、あたしは美花じゃなくて明花めいかだよ」

「明花ちゃんか……。で、あたしに話があるって聞いてきたんだけど」

「うん。美花から聞いてるよ。美花はね、ゆうこがゆうこのお母さんともっとお話ししてくれるように頼みに来たの」

「な、何でそんなことしなくちゃいけないのよ!あんな奴と話すことなんてもう何もないのよ」

「……。ゆうこ嘘ついてるね」

「嘘なんてついてないよ!!」

「ついてるよ。だって一番話さなくちゃいけないって思ってるの、ゆうこでしょ」

「……。…」

「一番後悔しているのはゆうこでしょ」

「そんな事ないわよ。それに今さら何を話せていうのよ」

「……。美花は言うよ。人生で一番後悔するのは誤解しあったまま離れちゃう時だって」

「……。でも、あの人はあたしの話をまともに聞いてくれない。自分勝手な奴なの」

「親への悪口とかって言えてるうちが幸せだよね」

「どういう意味?」

「悪口言うには相手がいるから。あたし達はもう、お母さんに言えない。いないから」

「いないの・・・？」

「あたし達のお母さんはね、自殺しちゃったの。美花が事故にあってあたし達が生まれたから、美花の事拒絶したの。毎日、美花にたくさんひどい事いった。お母さんもだめになっていったけど、美花もだんだん表に出なくなっていたよ。あたしや勇花や知花にとつてはそんなに痛い言葉じゃなかったけど、ずっと一緒にいた美花にとってその言葉の一つ一つはどれだけ重かったんだろう・・・。昨日まで笑って接してくれてたお母さんが自分を拒絶したら、それはどれだけ切ないんだろう。それでも美花はあたしたちが生まれたことを恨んだりはしなかった。だからなおさら閉じこもっていったんだろうけど・・・」

「・・・」

「そしてある日、お母さんは死んじゃった。お父さんはもうとつくの昔にいなくて、美花は一気に一人ぼっちになったんだ。お母さんの死は、美花に『解放』と『孤独』を与えたの。だから、もう悪口を言える親はいない。悪口が言えるのは、その人と会話してる証拠だから」

「・・・」

「どっちかがいなくなったら、何も言えなくなるよ！伝えたいことはしっかり、今伝えないと」

「あたし・・・、帰る！」

優子はそういうと自らの家のほうへ走って行った。

「頑張って、優子ちゃん」

明花から戻った美花はひた走る優子の背中を見て呟いた。

優子は家に帰るとドアを思いっきり開けて、母の前に立った。そして照れくさそうにそっぽを向きながら話した。

「・・・悪口、言いに来た」

「・・・そう」

些細な会話だけど二人はどこかが通い合ったような気がした。

次の日、優子は大声で美花の所へ走ってきた。

「美花ちゃん！」「

優子ちゃん。久しぶりだね」

「昨日もあったじゃん」

「あれは、明花のほうだったし・・・」

「それよりね、お母さんが付き合うの許してくれたの！」

「本当?!よかったね」

「お母さんから聞いたよ。美花ちゃんが説得してくれたんでしょ？」

「説得というほどでもないけどね」

「とりあえずありがとう!あたし、美花ちゃんが担任でほんとーによかった」

「あたしも優子ちゃんが生徒で良かったよ。これから職員会議だからクラスに先に行つて」

「うん。じゃあ、あとでね」

優子は楽しそうにクラスに向かっていった。

職員会議が始まると、校長が口を開いた。

「ええー、では職員会議を始める前に今日赴任してきた先生を紹介します。」

「赴任?今の時期にですか？」

水内先生が不思議に聞くと校長も少し困ったように答えた。

「ええ、唐突なのですがみなさん知り合いなのですぐにうちとけると思いますよ。では紹介します。三澤^{みさわ}麗子^{れいこ}先生です。」

「みなさんお久しぶりです。」

三澤と紹介された先生が先生達の前に出ると、水内先生は席を勢いよく立ちあがった。

「み、三澤先生!お久しぶりです。」

「水内先生、お元気でしたか？」

「はい」

「み・・・三澤先生ですか？ほんとに！」

水内先生に負けず劣らずに席を立ちあがったのは、美花だった。

「！・・・もしかして、風間さん？」

「はい！お久しぶりです！」

大声で、美花は三澤先生に近づいた。なぜなら、この三澤先生こそが美花の憧れの恩師だったからだ。

「風間さん！立派になったわね。全然気が付かなかったわ」

「そうですか！」

「ええーっと、懐かしんでいるところ申し訳ないのですが、話を続けます」

興奮がさめきらない三人に向かって校長が口をはさんだ。

「は、はい」

水内先生と美花は返事をするそれぞれ自らの席に座りなおした。

「三澤先生には風間先生の三年一組で副担任になっていたいただきます」

「わかりました」

「私のクラスですか？」

「よかったわね」

「は、はいっ！」

美花は三澤先生と仕事ができるととても浮かれていた。そして、その気持ちのまま教室に突っ込む勢いで入っていった。

「はいみんな、席について。今日は、新しい副担任の先生を紹介するよー」

「副担任？・・・！」

突然の事に教室内の生徒たちはきょとんとしていた。

「ええーっと副担任のっ！」

「三澤！！！」

美花が三澤先生を紹介する前に聖也が三澤先生の名前を大声で叫んだ。

「せ、聖也君知り合い？」

「知り合いも何も・・・」

「美花、何でこいつが！」

拓也も聖也に劣らずの形相をしていた。よく見れば、その二人だけでなくクラス全員の顔がこわばっていた。美花は何が起こったのかわからなかったがとりあえず三澤先生の紹介を始めた。

「三澤先生は今日赴任されてみんなの副担任になっていただくの」

「副担任だ？よくも俺らの前に現れられたもんだな」

「みんな、三澤先生とは・・・」

「美花ちゃん」

みんなの言葉を代弁するように優子は三澤先生の説明を始めた。

「前に聞いたんでしょ、拓哉に。うちらを見捨てた先公の話」

いつも明るい優子でさえその顔は何かを恐れているようで、言葉の一つ一つが重く感じられた。

「こいつがその張本人なんだよ」

「嘘でしょ？だってこの人は私の恩師で・・・」

「美花の？」

聖也や一組の生徒は一斉に美花のほうに顔を向けた。

「うん。だからこの人がそんなことするわけないよ。・・・ね、先生・・・」

「ええ。でも、私がこの子たちを突き放したのは事実なの」

三澤先生は下を向きながら話していた。

「そんな・・・」

「でも、それにはわけがあるの」

「わけ？」

「そんな言い訳聞きたくねー！」

聖也は自分の机を思い切りバンツと叩いて、説明しようとする三澤先生の声をかき消した。

「聖也君？」

「いきなり俺たちをあんな形で突き放しといて、この何か月間考え

た言い訳なんて聞きたくねーんだよ。」

「聖也の言う通りだ」

「今さら先生ずらししないでよ」

「もう、テメーの事を先生なんて思ったりしねーからな」

「みんな・・・」

一組は今まないほどに怒りをあらわにしていた。

それと同時に美花には切なさもあらわにしているような気がしていたのだった。

「あのことは本当に悪いと思ってる。今さらだけど・・・、ごめんなさい」

「み、三澤先生頭を上げてください。みんなも落ち着いてよ！」

「美花は、そっちの肩を持つのかよ」

聖也は美花の事を鋭い目で睨んでいた。

「肩を持つとか持たないとかじゃなくてっ」

「そんな真似、あんたがするとは思わなかった。そりゃ、あんたにとっては優しい恩師でも俺たちを信じてくれると思ったのに」

「そういうつもりじゃ・・・」

「出てけよ！三澤もお前も！もともとこのクラスに先公がいるってのがおかしな話だったんだ。俺らにはそんなのいらねえ」

「聖也君・・・」

「出てけっ！！」

「美花ちゃん」

三澤先生は落ち込む美花の肩に手を置いた。

「三澤先生」

「今はいったん出ましょう」

「・・・はい」

美花はそういうと三澤先生と一緒に出て行った。

「・・・聖也、言いすぎじゃない？三澤はともかく美花ちゃんまで優子は聖也に近づいて問いかけた。」

「あいつはきつと恩師のほうにつく。この世に私欲より他人を優先

する奴なんていない」

「私欲？あいつは私欲のためにあの三澤先生をかばった訳じゃないんじゃないの？」

話を割ったのは華純だった。

「なんだよ寺田」

「美花が自分の教え子より恩師を優先すると思うの？」

「じゃあなんでさっき三澤をかばうようにしたんだよ」

「誰かをかばうってことが真っ先に『守る』につながるのはせいぜい子供向けのアニメぐらい。現実はそのように単純にできてないの。」

『優しい』って行為が必ず『好き』につながるように。『怒る』ってことが必ず『嫌い』につながるように。あんた達ならその辺はしっかりわかってんでしょ」

「……」

「人を見る目は……、しっかり持てよ」

華純の言葉にクラスはしばらく沈黙した。

「……三澤先生」

廊下に出た美花は三澤先生に話しかけた。

「何？」

「なんであの子たちを置き去りにしていったんですか？」

「よくあることでしょ？いきなりの転勤なんて。だから、仕方ない事だったの」

「……生徒のゴミ捨て場。その名前を与えたのもあなたなんですよ？」

「……そうね。そんな名前も与えたわね」

「なぜ……ですか？」

「本当の事を言っただけよ。遊び半分だったんだけど、未だに引きずっているとはね」

「遊び半分って！その言葉がどれだけあの子達を傷つけたかお分かりなんですか？」

「ええ。さすがにあればやりすぎたわ。だからこそこに来たの。罪を償いに」

「後悔・・・、しているんですか？」

「・・・そうね。戻れたらって思うわ」

「なら、手伝います!!」

「えっ!」

「本当にそう思っているのなら、手を貸します」

「本当に？」

「はいっ!」

「ほんとにあなたは昔と同じで優しいのね」

「いいえ。私は昔、先生が教えてくれたことをそのままやっているだけです」

「ふふっ」

「戻りましょう、一組へ。その日に戻ることはできなくてもことは変える事はできるはずです」

「そうね」

美花と三澤先生は教室に戻った。

「み、美花」

聖也は美花の名前を小声でつぶやいた。だが聞こえなかったのか、美花は三澤先生の事について話した。

「三澤先生は本当にあの時の事を後悔してるの。許してもらえないかな」

「許すっ!こんなやつを?!」

拓也は納得できない顔で反論した。

しかし、そんな拓也にも屈せずに瞳は話を続けた。

「確かに、三澤先生はひどいことをしてしまったかもしれない。でも、この世界に間違わない人はいないと思うの。悪かったって気が付いて昔の事を悔やんでも何も解決しないけど、だからこそ傷ついた側はその人をもう一度信じて許してあげなきゃいけないと思うの」

！その人が悔やんでいるならなおさら」

「・・・三澤」

聖也は小さい声で話した。

「本当に後悔しているのか？」

「・・・ええ。本当に申し訳ないと思っているわ。・・・ごめんなさい」

「みんな、許してもらえない？」

美花は三澤先生を後押しするようにみんなに問いかけた。

「そうだな。失敗しない奴なんて、いないかもな」

そう言ったのはさっきまで反対していた拓也だった。

「俺は、もういいけど」

「あたしも」

生徒たちは次々に首を縦に振ってくれた。

「・・・どう？聖也君」

一人だけ反応しない聖也に美花は尋ねた。

「もういいよ。今回は美花に免じて許す」

「ありがとう！よかったですね、先生」

「ええ。本当に・・・」

それから、一組の三澤先生に対する態度は少しずつだけ変わっていった。さらにそんなみんなを見ていた美花はどうしようもなく嬉しくて、悲しくなった。美花の知らないみんなと三澤先生との時間。その間に結ばれていた強い何かを見せつけられた感じがしたからだろう。

「みんな！明日、私は出張で朝からいないけど三澤先生の言う事しつかり聞いてね」

「そんなの言われなくてもわかってるよ！」

「美花の時よりしっかりやってやるさ」

「美花ちゃん、心配無用だよ」

「そう・・・じゃあ、明日はお願いね」

「任せろ！」

「三澤先生、お願いします」

「任せてください！」

昼休みに美花が体育倉庫裏でぼんやりと空を見上げていると華純が話しかけてきた。

「浮かない顔・・・だね」

「華純ちゃん！まだ帰る時間じゃないよ」

「あの先生に嫉妬してんの？」

「なんか、みんなと三澤先生を見てたら、みんなの過ごした時間に、いつか私の時間が消えてしまう気がして・・・。へ、変だよね。先生は憧れの人なのに・・・。自分だけ置いていかれるみたいで・・・こわいっ」

美花は初めて自分の心の中の物をぶつけたようだった。しかし、華純から帰ってきた言葉は少し期待外れの言葉だった。

「・・・水を差すわけじゃないけど、あの先生は怪しい」

「な、何が？」

「あんたが今怖がっているように、重荷を背負ってる人は人の感情に敏感になってきている。本当の独りを知っている人ほど。だからって言うわけじゃないけどなんか、あいつには裏があるような・・・」

「華純ちゃん」

「何？」

「そんな風に言っちゃだめだよ。まだ何にもないのに。確かに怖いと思うけど、だからってその絆がなくなればいいと思うわけじゃない」

「そうじゃない！あいつには絶対何かあるって言うてんの！」

「たとえそうでも、今それを問いただす気はないよ。私は恩師を信じる」

「・・・・・・・・どうなっても知らないから」

次の日、さっそく三澤先生が教室で話し始めた。

「今日は美花先生いないけど私がしっかり授業するからね」

「オッケー！」

「うーん、じゃあまずあたしが帰ってきた本当の目的を言うね」

三澤先生の声がいつもより低くなるのを感じた。

「本当の？」

「あたしの戻ってきた目的・・・、それはあんた達に謝りにじゃないわ！」

その一言でクラスには嫌な予感がよぎっていた。

「この赴任は本当に偶然なの。あたしだってこんな学校嫌だったけど、仕事だからね。ただそれだけなの。でも、あんたらと仲悪いままじゃうまくやっていけないでしょ？だから、美花を使って仲直りしたの」

「嘘だろ？」

聖也は耳を疑いながらもその拳には力が入っていた。

「ふふ、でも「生徒のゴミ捨て場」っていうのがまだ残ってたなんて・・・、ハハハハッ！ほんとに笑える！」

「じゃあ、今までののは嘘なのか？全部、全部嘘なのかよ！」

聖也立ち上がりながら必死に「冗談」という言葉が返ってくるのを望んでいた。しかしそれは叶わぬ事だった。

「そう、あんたらを本気で指導できる奴なんてこの世にはいないわっ！」

「いる・・・」

聖也の声が震えるように教室に響いた。

「美花は・・・・。美花は俺たちを裏切らなかった！必要だと言ってくれた」

「美花にずいぶん入れ込んでみたいんだけどあんた達がこんな思いするの、元をたどれば美花のせいかもよ」

「何？」

「言ってたでしょ、あたしは美花の恩師だって。あの頃は、まだ今よりマシだったのかもね。今の美花と同じように生徒を愛し、心から向き合ってきた。でも、美花と触れ合っていくうちにあたしの人生は大きく変わることになった」

「どういうことだよ？」

「あの子の多重人格は、自分だけじゃなくて周りも不幸にすること。美花がいる間、片っ端から勇花になって暴走して何回頭を下げたかしのれないわ。あの子が卒業してからもあたしには問題児の扱いばっかでまともな生徒の担任を務めさせてはくれなかったのよ！それで、嫌になったの！こんな不良生徒を相手にするのはうんざりなのよ！」

心をえぐられるような感覚の中、沈黙を破ったのは華純だった。

「あんたら。まさかそんな事で美花を嫌いになったりしてないよね？」

「そ、それは・・・」

「あたしはよく分かんないけど、三澤先生があんた達を傷つけた事よりも美花はたくさんさんの幸せをあんた達に与えたんじゃないの？あんた達と過ごしたこの何か月でたくさんさんの事をしてくれたんじゃないの？美花もあたしも多重人格だけど・・・、小さいころは暴走した事もあったけど、でも三澤があんた達を傷つけた理由には直接結びつかない。たとえ不良の相手しかしてこなかったって、それが不良を見捨てて良いっていう理由にはならない。ただの逆恨みでしょ」

「あ・・・、あたしの辛さや苦しさに比べたらこいつらの痛みなんて何ともないでしょ」

三澤先生は声を荒げながら教卓をたたいた。

しかしその瞬間、三澤先生の声をさえぎるように、教室の扉が開いた。

「それは違います！」

ドアを思いっきり開けて入ってきたのは美花だった。

「苦しさや痛みなんて比べられるものじゃないんです。そんなもの安易に比べちゃいけない。私のせいで先生に深い傷を残してしまっただのなら心から謝ります。……でも、他の生徒を傷つけるような真似をするのなら私は先生を……一生幻滅します」

美花の言葉を聞いた三澤先生は美花に向き直った。

「恩師にそんな態度とれるなんて大した度胸がついたじゃない。ああ、呆れたわ。今度こそ永遠のサヨナラよ。じゃあね、私の生徒達」

立ち去ろうとした三澤先生だったが少し立ち止まってから美花に告げた。

「いい、美花。いつまでもそんな甘いやり方で通るほど、この世は甘くない。だって世界はいつだって誰にも優しくないから……。今だって結局あなたの優しさが結果的にこの子たちに大きな傷を負わせたのだから」

「……でも」

美花の言葉に三澤先生は振り返った。

「それでも……。私は疑うより信じて生きたい。あの時の先生のように」

「あたしをまだ、恩師だというの？」

「まだもなにも、私は先生を追いかけて教師になったんですから」

「……せいぜい、信じて傷ついて生きろ」

吐き捨てるように言う三澤先生は出て行った。

「……みんな、ごめんね。三澤先生はもともと悪い人ではなかったの。先生の言う通り私が先生を変えてしまったのだとしたら、結果的に私はみんなに重い傷をつけてしまった。……ごめんなさい」

「顔、上げてくれよ」

聖也いつも通り冷静な表情を浮かべて美花を見つめていた。

「俺ら、もう三澤を許してる。あんたの事も嫌いになったりしてな

い。美花の言う通り、誰かを疑うより信じて生きたい。三澤の言う通り世界は誰にも優しくないっていうのもわかる。・・・もう終わったんだ」

「聖也くん・・・」

聖也に続いてみんなが頷いた。

「そうだな」

拓哉も聖也に続いて話し出した。

「もう終わったんだ。気にしねーよ」

「だってあたし等の担任はいつまでも美花ちゃんなんだから」
優子も笑いながら言ってくれた。

「あ、ありがとう！」

「別に。礼なら寺田に言えよ。こいつも結構いい事言ってくれたし」

「ありがとう。華純ちゃん！」

「あ、ありがとう?!」

そういうと突如、華純に違和感を感じた。

「そ・・・、そうだよねー! やっぱり今回の一番の主演はあたしっていうか、あたしがいたから解決したわけだし!」

「か、華純ちゃん？」

「寺田のやつ、なんかキャラ違うね？」

聖也は驚きながら言った。

「も、もしかしてこれがもう一人の華純ちゃん？」

「他の人格って事か?!」

「へへへ。だいたい・・・っは!」

そこで、華純はしゃべらなくなり違和感も消えた。そして元に戻った華純が聞いた。

「見た・・・」

「うん」

「くそー! 見られちゃった」

「今の子は・・・?」

「もう一人のあたし。華^{はな}」

「華ちゃん」

「あたしが感謝されると調子乗って出てきちゃうからあたしに感謝しなくていいから!」

「ああ。だから、仮名が『ギャップ』なんだね!」

「うるさいっての!!」

美花が手をポンと叩いて納得すると、華純は大声で怒ったのだった。

その翌日、三澤先生は教師を退職し、既に学校にはいなかった。これで良かったとは言いい切れないけど、これでみんなが明日を見てまた進んでいけるなら……。と、美花は思っていた。

その日の帰りに優子が美花に話し出した。

「でも、まさか聖也が最初に許すって言うと思わなかった」

「どういう事? 優子ちゃん」

「なんやかんや「生徒のゴミ捨て場」って名前付けられて一番苦しんだの聖也だと思うし……」

「っえ!」

「その名前がついてから先生たちも引用するようになって、聖也は特に使えないただのゴミってののしられてたもん。きつと、たくさん傷ついたんじゃないかな」

「聖也君が……。すごいね、聖也君は」

「えっ?」

「あんな事されて、許せる皆はすごく優しいけど、そんな事されて真っ先にいいよって言える聖也君は本当に」

「美花ちゃんのおかげだよ」

「あたしは別に……」

「だって、きつと今美花ちゃんがいなきゃ聖也もあんなにあっさり

言えなかったと思う」

「そ、そうかな？」

「うん」

「だといんだけど・・・」

二人が話していると、誰かが美花に話しかけてきた。

「風間美花さんですか？」

「はいっ！そうですけど」

それは、美花と同じぐらいの青年だった。

「ああ、やっとみつけた！・・・っう！」

青年は突如苦しみだしてその場に倒れこんでしまった。

「えっ！あの、大丈夫！」

美花は戸惑ったが、彼を家に連れて行くことにした。

「ん・・・」

「あっ！気が付きましたか？」

「君は確か、風間美花・・・さん」

「はい。いきなり倒れたので、とりあえず私の家に連れて来たのですが・・・」

「ありがとうございます。もう大丈夫です」

「ならいいけど・・・。ところで、なんで私の名前を？」

「ずっと、探していたから。ベストを」

「ベストって！あなたは一体」

「僕は雪人。ゆきと君をずっと求めていたんだ」

「なんで、ベストって名前を知ってるの？もしかしてインベンターと・・・」

「ごめん」

「えっ？」

「僕、よく覚えてないんだ」

「覚えてないって・・・、記憶喪失ってこと？」

「うん。唯一覚えているのが自分の名前と、ベストと言われる君を」

見つけ出す事で」

「本当に何も覚えてないの？」

「ごめん」

「じゃあ、質問があるの」

「何、かな？」

「あなたインベンターの事とか知らない？」

「い、いんべん……。ごめんね、本当に自分の事は名前しか……」

「そ、そうか。それなら、完全に回復するまでここに泊まっていたいいから」

「えっ、でも迷惑じゃない？」

「平気だよ。気にしないで」

「それじゃあ、遠慮なく」

「よろしくね」

こうしてしばらくの間、雪人は美花に家に泊まることになった。

「ん、ベスト」

次の日の朝、雪人は美花に尋ねてきた。

「どこかへ行くの？」

「うん。学校に。私、教師だから」

「そうだったんだ。なんか、ぴったりだね」

「ぴったり……。そうかな。そ、それにしてもベストってやめてくれない？」

「でも君はベストだろ？」

「そうだけど、私はみんなから美花って呼ばれてるからそう呼んでくれると嬉しいんだけどな」

「美花。そうだね、じゃあこれからそう呼ばせてもらおうよ」

「うん、よろしく！じゃあ行ってくるね」

「いつてらっしゃい」

学校に行っても美花は雪人の事を考えていた。

（もしかして、惚れたのか？）

心の中で勇花が美花に訪ねた。

「そ、そんな事は・・・」

（わかってんだろーな。あたしらみたいな中途半端な人間が誰かを好きになるってことは相当の覚悟が必要になるっ！それに、ベストって名前を知ってるからには必ず裏がある。インベクターと何かしら関係があるのは確実なんだ）

「わかってるけど」

（ともかく、華純に伝えといた方がいい）

「うん」

美花はあまり気が乗らないまま教室に行った。

「みんなおはよー」

元気にクラスに入った美花だがなぜかみんなの様子がいつもと違った。

「ど、どうしたの？」

「羽瀬から聞いたぜ？男を泊めたんだろ？」

聖也は二やつきながら美花に言った。

「え、それは・・・」

「ついに美花にも春がきたのか！！」

「おめでとー、美花ちゃん」

「いや、そういうわけじゃ・・・」

「照れちゃって」

「照れてないよっ！ホントに。ちょっと気になったから・・・」

「もう恋心が！」

一組の生徒たちはよってたかって顔を真っ赤にする美花をいじっていた。

「違うってば！あっ、それと華純ちゃん」

「何？」

「放課後・・・、いいかな？」

放課後、美花は華純に雪人の事を話した。

「だから、インベクターと関係あるのは確かなんだけど少し厄介な
ことになってて」

「誰だよ、インベクターって？」

声の方向には聖也が立っていた。

「な、なんで」

美花は聖也に話を聞かれたと内心おどおどしていた。

「俺、美花から大切なものいっぱいもらったし守ってくれた。俺も
少しでいいから力になりたい。話してくれよ！もう、守られてるだ
けは嫌なんだ！」

「聖也君・・・」

「どうする？美花」

「・・・いつまでも、聖也君みたいに心配してくれてるのに黙った
ままなのは駄目だと思った。聖也君にだけでも、少しでも聞かせ
ちゃダメかな」

「美花がいいならあたしはかまわないけど」

「その代り今は、華純ちゃんと話させて。その後必ず聖也君に話す
から」

「わかった」

だから、記憶喪失みたいで何のために私を探してたのかっていうの
を忘れてて、インベクターの正体も・・・」

「肝心なことだけ忘れすぎじゃない？そいつが本当にインベクター
の手下なら多重人格だろうし。警戒してた方がいいよ」

「それは、わかってる」

「あたし、その人に会ってみたい。お兄ちゃんかもしれないし・・・
」

「うん。じゃあ、今日一緒に帰ろう。聖也君も。全部話すよ」

「わかった」

その後、帰り道で聖也に美花はインベンターことを全て話した。

「・・・っていう事なの・・・」

「結構大変なことになってんだな」

聖也は美花を心配そうに見つめていた。

「仕方ない事よ。あたしら自然体にとっては・・・」

「そうかもしれないけど」

「あっ！美花！」

そこには家にいるはずの雪人が立っていた。

「ゆ、雪人！」

「えっ！あいつが？」

聖と華純は突然の事に驚いていた。

「なんで、ここに？寝てなくていいの？」

「美花に会いたかったから」

「ゆ、雪人・・・」

「で、どうなんだよ？お前の兄貴じゃねーのか」

聖也は華純に問いかけた。

「違うみたい」

「そっか・・・」

「その子達は？」

雪人は聖也と華純を指さしながら尋ねた。

「私の生徒達なの」

「へえ、よろしく」

「あ、ああ」

「・・・。美花、あたし帰るわ」

「じ、じゃあ俺も」

「わ、分かった。また学校でね。・・・帰ろうか雪人」

「うん」

帰りに、二人は公園に立ち寄って話した。

「雪人、ほんとに全部忘れちゃったの？」

「信じられない？」

「ううん。でも、自分が何者かわからないのはつらいんだろうな
て」

「ありがとう美花。僕は君に会えてすごく嬉しかった。探してたか
らなんて理由じゃなくてもっと深い意味で」

「雪人……。こ、これからも居たかったら居続けて良いから。で
も、勝手にいなくなったりはしないでね」

「美花？」

「私の姉さん。麗花^{れいか}も私が高校卒業してから突然いなくなっちゃっ
てすごくつらい思いをしたから」

「約束するよ」

「えっ？」

「絶対にいなくなったりしないって」

雪人は美花を思いっきり抱きしめた。美花も雪人に深い感情を抱
いていたのだ。

それから数か月、彼は私と一緒に暮らした。

彼との時間は本当に楽しくてこんな日がずっと続くと思っていた。
・
・
・
でも。

「じゃあ、行ってくるね」

「いってらっしゃい」

いつものように美花を送った雪人は突然苦しみだしたのだ。

「れ、れいかっ……。風間麗花」

放課後、美花が帰ると、雪人の姿は消えていた。

「雪人どこ？ 雪人・・・ 雪人っ！」

美花は混乱したがとりあえず華純と連絡を取った。

♪プルルル

「もしもし？」

「華純ちゃん！ 大変なの。雪人が・・・」

「いなくなった？！」

連絡を受けた、華純はとにかく美花に会おうと提案した。

一方、学校帰りの聖也が帰っていると、美花と華純の事を見つけた。

「ハー。今日も疲れた。・・・？ あれは、寺田と美花？ どうして・・・」

聖也は築かれないように二人を尾行したのだった。

「華純ちゃん、どうしよう。私の不注意で・・・」

「落ち込んでる場合じゃないでしょ！」

「・・・そうね。落ち込んではいられない」

美花はいきなり落ち着き払った。華純は知花が入れ替わったのだとすぐに分かった。

「彼がいなくなったって事は、おそらくインベントアの所に戻ったはず。インベントアのいる場所の目星はつかないの？」

「そんなの知ってらとっくに乗り込んでる」

「なら、直接聞いた方がいい」

「誰に？」

「そこにいるんでしょ。ダブル」

「あれっ、バレてた？」

その声と同時に、ダブルが姿を現した。それを見た知花は勇花と入れ替わった。

「・・・雪人の居場所をとっととはけ。痛い目にあうぞ」

「教えるよ、勇花」

「なんでそんなあっさり」

「こっちもいろいろトラブルがあってね。インベントーは君達に会いたがってる」

「どうする、勇花。罠かも・・・」

「美花が・・・、会いたがってる」

「じゃあ、ついて来な」

ダブルはそういうと歩き出し、二人もその後を追って行った。

しばらく歩くと、インベントーのアジトについた。

「ここにインベントーが・・・」

「早く来な。あの方もずっと会いたがってたよ。ベストに私に？」

「ああ。もう何年も顔見てないからって」

「もしかして、その人って私の知り合い？」

「・・・ついたぜ。あとは自分の目で確かめな」

ダブルは目の前のドアを思いっきり開けた。

「やっとここまで来てくれたね。ベスト・・・、いいや美花」

「あなたはっ！」

美花の目に飛び込んできたのは信じられない光景だった。

「ね、姉さん・・・」

「美花の姉さんっ！」

声の主は美花達をつけていた聖也だった。

「！せ、聖也君！なんでここに？」

「お前らを見かけたから心配でつい・・・」

「れ・・・い・・・か・・・。麗花・・・」

麗花の側には、雪人が倒れていた。

「雪人！」

「・・・ダブル。どうしてただの人間がいるの！」

麗花は少し怖い声で言った。

「すみません、インベントー。あとをつけて来たらしくて」

「この場所は特別な者だけが入れる聖地だっていうのに。・・・まあ、そいつはあとでいいや。それより、久しぶりだね美花」

「ど・・・どうして姉さんが。インベンターっていうのは姉さんの事だったんですか!」

「そうだよ。私はインベンター。特別な人間である多重人格者を作り出す特別な存在」

「特別・・・。それより雪人は・・・」

「雪人が心配? この子の事教えてあげる。雪人も私が作り出した化学体の多重人格者の一人、仮名はロスト。でも、もうすぐ雪人は消える」

「消える?!」

「多重人格っていうのは時折、互いの魂で拒絶反応を起こすことがあるの。化学体ならなおさら。もうすぐ拒絶によって主人格の雪人は消える。そしてそうなれば私の実験も成功を迎える」

「実験?」

「インベンターは前々から主人格を入れ替える実験をしてもらったんだよ」

「石井君」

「その実験のために作られたのが化学体の俺らだ。人工的に人格を作り出すのは実験のほんの序章だったんだ」

「そんな事のために化学体を作り出したのか」

華純は、拳を握りしめて怒っていた。

「なぜ・・・、なぜこんなことをするの、姉さん!」

「きっかけは他でもないあんだよ」

「私・・・」

「あんたが多重人格になったあの日。私はあなたに特別な感情を抱いた。それから私の研究は始まったの」

「特別な?」

「一人の人間が別の個性をもつ人間を持っている。素晴らしいじゃない? 人間が全知全能になれる日も近いわ!」

「全知全能？そんなものを得るために姉さんは・・・」

「もうすぐそのための実験が成功するの。この雪人の主人格が入れ替わることで！」

「れ、いか・・・、麗花・・・」

「さあ、来なさい。新しい主人格となるために！」

「うっ、うわーーーーー！」

「雪人ーーーー！」

雪人が大声を上げて倒れた瞬間、違和感を通り過ぎて全く別の感覚を全員が雪人に感じていた。

「ゆ、雪人・・・？」

「ゆきとおく？誰だそりゃ？！」

話し出したのは雪人とは全く違う者だった。

「あ、あなたは？」

「俺か？俺は・・・、誰だ？名前はないな」

「私が生みの親よ。私が名前を付けてあげるわ。あなたは・・・、海人でどうかしら？」

「海人か。悪くねえな」

「そ、そんな。雪人が・・・」

美花はあまりのショックにその場に座りこんでしまった。

「しっかりしなさいよ、美花。四つも人格を持ってるあんたの主人格が壊れたら雪人と同じにっ！」

「美花！！」

美花はしばらく動かなくなると、再び顔をあげた。

「・・・大丈夫だ」

危機を察したのか勇花が再び現れたのだった。

「勇花になって崩壊を避けた。本当に興味がわくわ」

「主人格の崩壊を抑えるのはガキの頃経験してるからな」

「ああ、母親に拒絶されたときね」

「ねえ、インベントー。話を割るようだけどあたしの質問にも答えてくれない？」

「何かしらギャップ」

「あなたが作り出した化学体で寺田裕って人がいたでしょ？どこにいるの？」

「裕？・・・ああ、あの失敗作ね」

「失敗・・・」

「裕にも雪人と同じ実験をしていたのよ。裕は人格が入れ替わる前に精神そのものが壊れてしまったの。だから裕本人は捨てたわ。今頃どこにいるのか」

「捨てた、兄を？本人ってどういう意味よ？」

「裕の中にいたもう一つの人格の煉^{れん}だけ取り除いたのよ。その人格が今思えばこの海人ね」

「そんな・・・」

真実を聞いた華純はその場に座り込んでしまった。

「おいっ、しっかりしろ！お前まで自分を精神崩壊に追い込むつもりかっ」

勇花が声をあげると、華純はふらつきながらも立ちなおした。

「甘く、見ないでよ・・・。平気よこれぐらい・・・」

「お前に今無理されても厄介だ。こうなったら・・・。華純、倒れないなんて偉いな！」

「偉い・・・。そうかな」

勇花の言った「偉い」という言葉を聞いて、華と華純が入れ替わったようだった。

「華、しばらくそのままでいろ」

「へ、なんで？」

「おいっ、勝手に話進めてるけど俺はどうすればいいんだ、麗花」
海人が話を割るように入ってきた。

「あなたには試してもらいことが山ほどあるの。やってもらおうわ」

「試す？何をする気だ、麗花」

さっきの話を聞いた勇花は嫌な予感がしていた。

「海人には、特殊な仕掛けをしてあるの。それこそ全知全能の力」

「全知全能だと？」

「そう。海人にはあらゆる力を備えてある。お前たちには手におえないような」

「やばい。知花、何とかなんないのか？」

（海人の主人格を雪人に戻すことができればいいんだけど）

「そんな事できんのか？」

（勇花。以心伝心って知ってる？）

「互いの心を言葉なしで伝えるやつか？」

（何とか美花の魂を海人の中へもぐらせて、精神の奥深くで眠っている雪人の人格を引っ張り出せば・・・。相当危険だけど）

「下手すりゃ、美花の人格がこっちに帰ってこれなくなるって事か？」

（主人格の美花が消えたら私たちも・・・）

（勇花、知花）

話に入ってきたのは美花だった。

（その作戦、やって！）

（でも・・・）

（私は雪人を取り戻したい。雪人のそばにいてあげたい。たとえば、帰れなくなったとしても）

「美花・・・」

（美花がやりたいならやればいいじゃん！）

（明花！）

（美花は今まで生徒以外でこんな風に思った事はなかったんだよ。もう好きな人を持ってもいいんじゃないの？）

「・・・わかった」

（勇花！）

「でも、必ず戻ってこいよ！」

（うんっ！わかった）

（それなら、勇花が海人にギリギリまで近づいて！あとは私が・・・）

「了解！聖也、華。」

「ん？」

「なんだ？」

「少しだけ、あいつらの気を引いとけ」

「引いとけて・・・」

「んじゃ！」

「あっ・・・。イ、インベクター！」

困った聖也だが直感的に自分が美花達の力になれると察したのか、麗花達の気を引こうとした。

「まだいたの？ただの人間風情が」

「俺、全知全能とかそういうのってよくわからないけど、それがいいなんて思わない」

「なんですって！」

「俺は多重人格でもないしそういうのがいいとか悪いとかわからないけど多重人格だってその人から見ればそれが欠点だったりするんじゃないのか！人は欠点を乗り越えていくから強くなれるんだ。元々欠点がなかったらきつとつまらない人生になると思う」

「・・・そう。欠点は誰にだって存在する」

いつの間にか華が華純に戻っていた。

「それを直したいとは思うけど、全てを簡潔に出来ようとは思わない。だって、この世に完璧なものなんて存在しないのだから！」

「それを今、私が完成させようとしているのではないか！人々が嫌う欠点を」

「欠点は人を弱くする。欠点があるから自分を他人と比べてしまうんだと思う。でも、逆に欠点が自分には存在しなかったらきつと他人を好きにはなれないと俺は思う。誰かを好きになるときはたいいてい、自分にはない他人の良いところを見つけた時だと思うから！」

「クソガキがっ！ダブル、そのただの人間を追い出せ！この実験が成功すればあなたも全知全能に！」

「悪いけどインベクター」

ダブルは麗花に反抗的な目を向けていた。

「俺も完璧なんてもものよりもっと大事なものをもって生きていきたい」

「何だと？」

「俺、お前に作られたから今まで言うこと聞いてきたけど、自分でお前の役に立ちたいなんて思ったこと一度もねえんだ。それに、こいつらの言ってる事の方が全然正しいと思う」

「くそ、役立たずが！もういい、海人お前の力で全てを消し去れ！」

「させねーよ！」

気が付くと勇花は海人の最も近くにいた。

「雪人、今助ける！頼むぞ知花、美花！……任せてっ！」

「何をする気だ知花！」

「なんだこいつっ！」

「行って来い、美花ー！」

知花が思いっきり海人にぶつかりと海人と知花は倒れこんでしまった。

「……雪人。……雪人。」

「……誰？」

「雪人、起きて。帰ろう……。」

「き、君は……、美花。」

「雪人。」

「どうしてここに？」

知花の方法が成功し、美花は雪人が眠る精神世界にいた。

「連れ戻しに来たの。みんなの所に帰ろう。」

「……駄目だよ。」

「どうして？」

「僕は、麗花に全てを捧げたんだ。彼女の側にいなくちゃ。」

「なんでそこまで姉さんを？」

「麗花は僕を助けてくれたんだ。瀕死の僕の中に海人を取り入れる

ことで……。だから麗花には恩を返さなくてはいけないんだ。たとえそれで僕が消える定めだとしても」

「雪人は優しいんだね。恩を姉さんに返すために自分を殺して姉さんに尽くしてきたんだよね」

「あの日……」

「えっ？」

「思い出したんだ。君を探していた理由。本当は君と親しくなっても麗花の所へおびき寄せるともりだったんだ。でも、あの時から僕の魂は崩壊し始めていてその目的を忘れて君と本当に親しくなった」

「雪人……。もう、いいんじゃない？」

「え？」

「自分を殺して生きるのはもうやめようよ。姉さんへの恩ならきつともう十分返したよ。これからは自分のために生きてもいいんじゃない」

「でも……。僕は」

「私もそうだった。多重人格は時として人を不幸にしてしまう時があるからずっとこの気持ちを抑えつけてきた。でも、雪人に会ったその日からもう私の中には抑えきれないの。私には雪人が必要なの。これからずっと」

「……。帰りたい」

「雪人」

「僕も君の所へ帰りたいよ。もう、自分を押し込めて生きたくない。……美花、僕は君を愛してる」

「私もだよ」

二人は今度はお互いの心を開放した。

「そういえば、君も倒れた僕を助けてくれたよね？君にも恩返しをしなきゃ」

「恩返し……。だったら、お願い聞いて」

「何？」

「ずっとそばにいて、強制じゃなくて恩返しじゃなくて海人じゃな

くて、雪人ととしてそばに・・・」

「わかった。君の一生そばにいる。雪人として。もう自分は殺さない」

「雪人。・・・おかえりなさい」

美花は自らの体に戻り、やがて勇花が目覚めた。

「・・・！美花が、戻ってきた」

「ほんと？勇花」

聖也は心配そうに勇花に確認した。

「・・・うん。私、戻ってきたよ」

その声は紛れもなく美花の物だった。

「美花！」

「戻った？美花、お前いったい何をっ」

何が起こったのかまるで理解できないでいる麗花の隣にいた海人は突如頭を抱えた。

「うっ！」

「どうしたの、海人！」

「なんだこれっ、頭がっ！！」

「雪人！戻ってきて、一緒に行こう。明日へ！」

美花はこれ以上ないほど大声で雪人の名前を叫んだ。

「美花、お前海人に何をっ」

「れ、麗花」

「大丈夫、海人」

「悪いですけど、もうあなたへの恩返しは終わりです」

「お、お前！雪人？」

「雪人！」

「美花！」

「どうするインベントー。もうここにお前の仲間はいない」
ダブルは麗花に向かって言い放った。

「終わりだ。全部」

「くそっ、なぜ雪人？なぜ全知全能への道をお前達はたやすく捨てるの？」

「僕は全知全能なんてものよりもたった一人の僕と僕の愛する者を守りたい。ただそれだけ」

「貴様っ・・・」

そこへパトカーのサイレンが鳴り響いた。

「なんだ、サイレン？」

「悪いけど警察に通報させてもらった。インベクター、お前重要指名手配犯だったらしいな。警察も喜ぶよ」

聖也は笑って言った。

「くそ、くそ。美花！私は実の姉よ。助けようとは思わないの？」

「ごめんなさい。あの頃の優しい姉さんはいなくなってしまいました。今のあなたを姉さんとは思えない」

「美花・・・」

「ごめんなさい、麗花・・・」

「インベクター、風間麗花逮捕！ご協力感謝します」

「美花」

麗花は今までにないくらいの怖い声で言った。

「覚えときなさい」

「・・・」

美花は何も返事を返さなかった。いや返せなかったのだ。

「っう！」

その直後雪人は頭を抱えて、その場に膝をついた。

「雪人・・・。雪人、しっかりして！どうしたの。雪人！！」

雪人は苦しみだすと、再び意識を失ってしまった。

あれから、五か月がたった。言葉にしてみればあっという間だけ

ど俺の周りではたくさんの事が起こった。

まず、あのインベンターの一件以来、美花は学校を長期休暇していた。あの後、雪人の目が未だに覚めないため看病をしているらしい。その代りの一組は水内先生が受け持ってくれた。でも、みんなどこことなく静かで先公達の間でも一組の悪い噂は消えていった。

寺田はあの事件の後すぐに学校をやめた。行方不明になった兄を探すらしい。この世界中を探すのは大変と言っていたけど・・・、「世界が広がって事は見つかる可能性も広がって事でしょ？ 途方もないけど、美花が雪人の魂を引きずり出せたようにたとえ兄貴が壊れていてもあたしは兄貴を救い出す」と、勇気をもって出て行った。他の奴等のそれからが気になっていたとき一回だけ明花に会った。明花は色々な事を知っていた。

まず風間麗花は無期懲役の判決を下され、自ら作り出した化学体を元に戻している。ただ、石井だけは二重人格のままでいいといったらしい。

「きっと、学にとって強はもう自分の一部なんだよ」と明花は笑って言った。

あまり関係ないが、風の噂であの三澤は保母になったらしい。もう一度、しっかり子供と向き合いたのだという。

今の美花と雪人の状態を明花に聞くと、

「大変だけど、美花はそう思っていないよ。やっと美花が自分のやりたいことをやっているから」と嬉しそうだった。きっと、美花の喜びは他の人格にとっても喜ぶべきことなのだろう。

でも、その後も美花が教室に来ることはなく、ついに時はながれ卒業式を迎えた。

「今日ぐらい、美花ちゃんに来てほしかったな。圭介とうまくやってるって報告したかったのに・・・」

「おい、美花いるか？」

一組に来たのは石井学として生きている強だった。

「なんか用か？」

「ああ、学が大学進学できたから報告しようと思ったんだけど・・・、いないらしいな」

「たぶん、今日は来るだろう」

自信を持って拓哉が切り出した。

「拓哉、美花に会ったのか？」

「いや。でも、あいつがこんな中途半端に俺達を見捨てるわけないだろ。あいつが言ってた「ゴミ捨て場再生革命」で、俺らのクラスはもうゴミ捨て場って呼ばれないし、みんなの進路もそれなりに決まった。あとは、美花が来れば大成功じゃねーか。あいつが約束破らないのはみんな知ってるだろ」

「そうだけど・・・」

みんなは信じていた。心のどこかで美花は今日は来ると。いや、拓哉と同じようにその気持ちは確信に近かったかもしれない。

チャイムが鳴り終わると、勢いよくドアが開いた。

「はーい、みんな席について！」

「あっ！美花」

クラスの奴らが一斉に叫んだ。

「うっせーな。黙れって言ってるんだよ。めんどくさいこと言わせんな」

「勇花・・・」

聖也が嬉しそうに小さくつぶやいた。

「私語は慎め。せっかくの高校最後の晴れ舞台なのに、うるさくして終わらす気？」

「知花」

今度は拓哉が今までの思い出を思い返すように知花を呼んだ。

「うるさくするのはゼーゼーんぶ終わってからだよ！みんな、頑張っ
てね」

「明花ちゃん」

最後に優子が笑いながら呼んだ。

「雪人は平気なのか?!」

聖也が心配そうに聞くと、少し間を開けて美花が答えた。

「あ、あのー、実はね、雪人はとくに目を覚ましてただけど・
・、なんか、雪人とたくさん思い出作ってたら来れる日まで潰しち
やって！ははっ！」

「って、事は有するに・・・」

「あいつと惚気てたって事か？」

「わかるよ、美花ちゃん!!」

それぞれの反応はバラバラだったけど、二人が元気で仲良くやっ
ている。それを喜ぶのはみんな一緒だった。

「え、ええーと、結構時間かかったけど、私の最後の授業。

一瞬でやっちゃうからみんなしっかり聞いてて。みんなはこの一年
たくさん頑張ったと思う。たくさん学んだと思う。困難を乗り越え
る強さ、自分を大切に思ってくれている人の存在、過去を乗り越え
る心、たとえ無力とわかっていても誰かの役に立ちたいという思い。
みんながこれから社会にでもきつとそれは明日につながる武器に
なる。それを忘れずに上を向いて歩いていけばきつとずっと新しい
自分に会える。華純ちゃんが抜けてクラス全員とはいかなかったけ
ど、このクラスで最後まで入れて幸せだった！ありがとうみんな、
それと私こういう時はさよならって言わないんだ」

「じゃあ、なんて言うんだよ」

聖也は美花に尋ねたが、実際はその答えは聖也や他の生徒も全員
知っている答えだった。

「・・・・みんなっ！いってらっしゃい！」

終わり
・
・
・

(後書き)

初めての投稿なのであまりうまく書けなかったと思います。
最後まで読んでいただいた皆様、本当にありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3069z/>

多重人格者と不良組

2011年12月10日20時50分発行